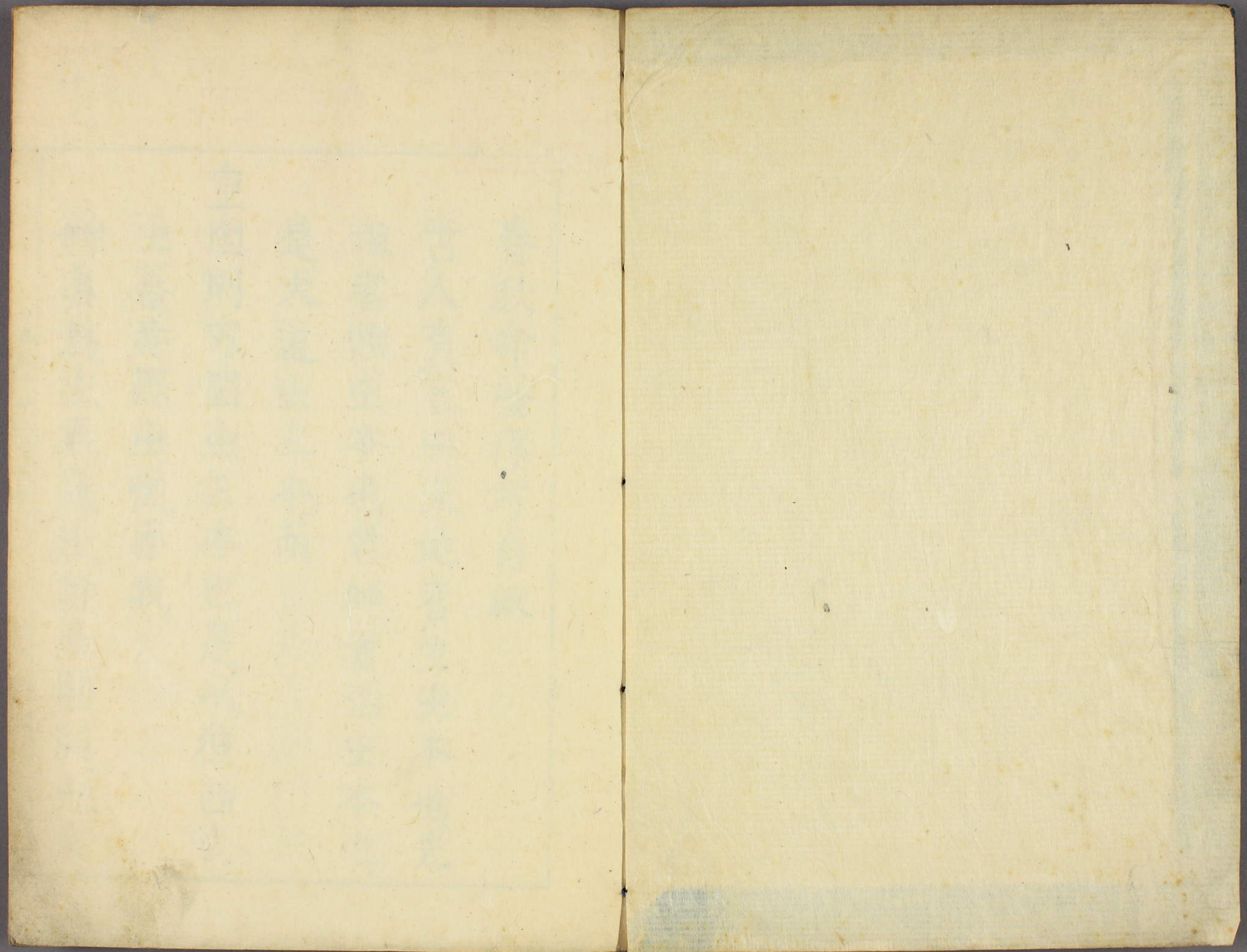


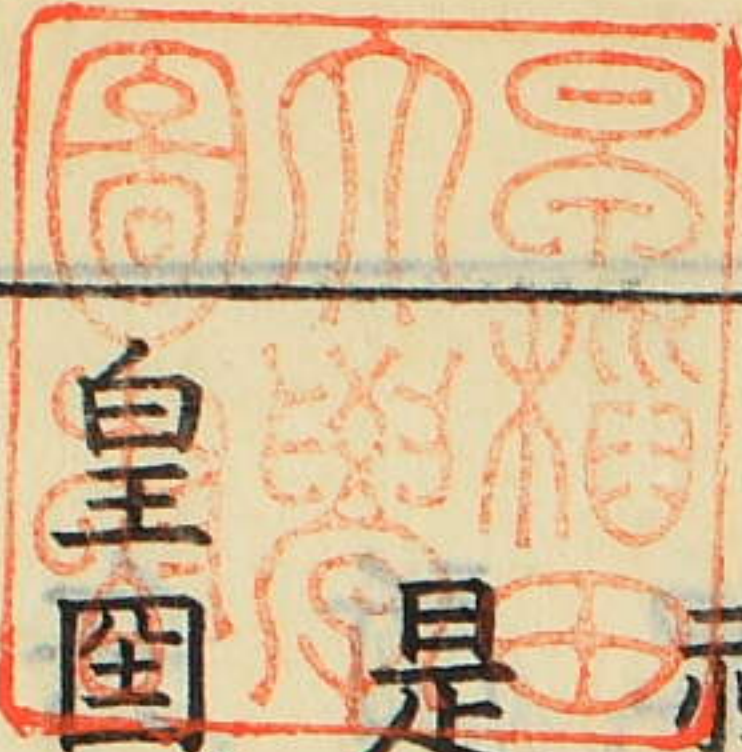
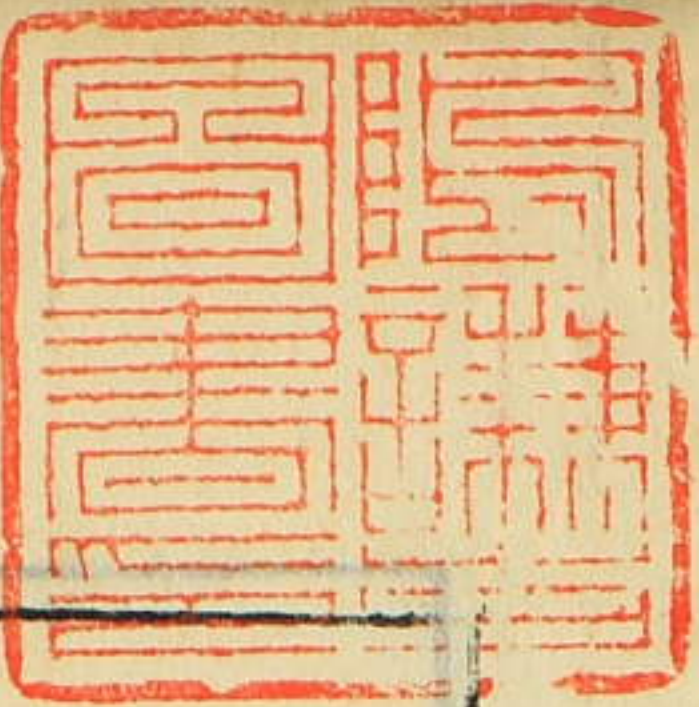


春秋命歷序攷

上







春秋命歷序考自敘

古人有言曰。天地者生出本也。先

祖者類出本也。君師者治出本也。

是大道出三本而

皇罔則万罔出三本也。是以彼西戎

出蕃。赤縣出州。亦我

神真爲出君爲出師而開闢出含

養出使蠢化蠕動始有倫理穴居
野處方有教養出罔也是故政刑
兵陳律曆度量文字卜筮醫藥凡
所以經綸天下而百世不可刊綱
紀民用而一日不可闕者亦皆我
神眞所授出道也上皇大一出爲
一也盤古眞王出爲二也三皇出

御三才也五帝出紹五運也可以
見矣唐虞出世夏后出昔人質物
朴猶能道此道教此教焉夏后氏
亾而大道斯廢擬聖乃出殷篡周
弑而六親不和國家昏亂於是乎
始有儒矣從是以來儒流出書曰
出百氏出說益盛視大道如異端

見ル百九出結益靈壽天並異
神真如物怪。以爲荒唐不經。非我
所宗。其所以經綸天下。綱紀民用
者。變爲覬覦。出器化爲虛僞。出具
嗚呼。天出未喪斯文也。神典出所
傳。玄經出所識。與古籍出明文。先
聖出至言。雖遭歷代出災亂。似一

縷出。不削而尚幸。有炳焉如日月。
確乎不可拔者。造次顛佈。思出思
出。而
神開我心。使我宗我所宗。若夫儒
流百氏。猶子孫而詈先祖。枝葉而
惡本根也。豈足復知大道
皇因出所以爲三本哉。然其起伏興

廢亦復非一。而其存于今者。大抵有八家。曰神。曰玄。曰儒。曰佛。曰醫。曰兵。曰易。曰曆。雖然其在。王公大人者。非吾輩所能知也。唯至於卑賤如余者。自成一家。則神家不知神道。玄家不知玄理。儒家不知儒旨。佛家不知佛意。醫家不

知醫範。兵家不知兵機。易家不知易威。曆家不知曆式。而各游泳於一潦。未見驪龍出變化。彷徨於孤埳。未覩崑崙出極天。夏蟲疑冰雪。井蛙怪江湖。生於此國。而無此國。仕於此君。而蔑此君。不知神真君師出德。開闢含養出恩。則

一也。故吾爲出恐懼。著述考徵。旣
軼百部。且踰千卷。又近者著太界
古曆傳。三曆由來記。古曆日步式。
月步式。弘仁歷運記考。古史年歷
編。古今日契曆。夏殷周年表。前漢
歷志辨。春秋曆本術編。及此書。以
明古曆出真式也。夫曆所以論天

常志長久也。然太古出世。年曆出
數紛紜。不一定。孟洵無講明。其譌
寔起于殷。西伯姬昌矣。蓋旣有流
派。奚不遡於原泉。苟有年曆。敢不
推乎太古。且以余觀出何道。不欲
一定出。誰人不願講明出。而稍有
識者。輒有蛇足出過。其不然者。徒

有_レ蠡測出_レ嘆。抑_レ人長_レ而不知_レ其年
出_レ經歷。我身出_レ長短。雖_レ曰不_レ愚。吾
不信_セ也。吾爲_レ出_レ憤悱。獨採_レ春秋命
歷序。祖述_レ出_レ憲章。出_レ訂正。錯簡補
綴。脫文參伍。出_レ於弘仁。歷運記錯
綜。出_レ於明文。與至言。方始明_レ
神真所授。出道家神典所傳出說。

乃似_レ口脗。出_レ結符節。出_レ合也。吾既
回_レ大澤於一步。拯_レ將墜於千仞。於
是乎。足以爲_レ金鈴木舌。而一振文
教矣。不然。與不知_レ其年。出_レ經歷。我
身出_レ長短者。莫_レ以_レ異焉。方_レ今海內
昇平。文物鼎新。上有_レ擊壤。出_レ化。下
有_レ鼓腹。出_レ樂。博覽多通。出_レ才。典故

考證出家。凡數十百人矣。然而一定出。講明出者。蓋或有出。我未見出。則其數十百人。亦猶一凡庸耳。復安得論天常志長久者乎。雖然。人人將曰。其所祖述憲章。亦惟爲讖緯出書。其所訂正補綴。亦皆取出乎臆創。余雅謂士君子待知己。

於千載。豈求善價於今日哉。苟有奉。

帝道唯一出學。學。繇幽無敵出道者。則將一目擊而思過半矣。彼凡庸出徒。雖提耳而曉出。不能使出。遂信出也。我惟宗我所宗。亦豈求信乎。不信出人哉。昔從太界作甲曆。

命歴序と。そは考へを。かくも。の。そ。申。ふ。を。し。れ
た。る。也。此。の。お。の。大。倭。の。を。今。し。
た。る。と。名。ぬ。と。此。を。殊。に。奇。し。と。も。
遠。の。神。の。大。神。歌。の。を。あ。る。也。と。
と。海。那。留。ふ。ま。し。と。又。に。踏。の。程。と。
浮。を。成。の。事。と。の。風。と。拂。つ。
と。や。と。の。事。と。入。鏡。な。新。と。者。

命歴序と。そは考へを。かくも。の。そ。申。ふ。を。し。れ
た。る。也。此。の。お。の。大。倭。の。を。今。し。
た。る。と。名。ぬ。と。此。を。殊。に。奇。し。と。も。
遠。の。神。の。大。神。歌。の。を。あ。る。也。と。
と。海。那。留。ふ。ま。し。と。又。に。踏。の。程。と。
浮。を。成。の。事。と。の。風。と。拂。つ。
と。や。と。の。事。と。入。鏡。な。新。と。者。

ともむまちうめかぬ。よくまはは。
 天保の子年やひまひま。祚乃
 清國より稀ぬぬ。七千七の
 らふをむの海を申。まふが長い。
 みまもまの和賢ちま。

春秋命歴序考上卷

大壑 平篤胤撰述

門人

大和国 穂井田忠友

武藏国 森田昌成

三河国 羽田野敬雄

校同

春秋命歴序考。春秋の古記緯書取る。近頃舶來せ依明此
 孫鼓が古微書といふ物ふ。大抵そ此全書外らむと覺し死
 を擧て。隋經籍志。春秋緯十有三篇無所謂命歴序者。諸書徵
 引冥莖歲代帝王籙運顧多主于命歴則欲推遠古之聞不得
 不列是書矣。や云牙也。春秋緯十有三篇此由來も同書也。漢
 の類多集免て五十篇と爲して七經緯各自其篇部を爲
 ぬにし。魏世よ宋均や云。志人始めて合集して三十卷。

得て總名を春秋災異といふ而る繇と繇を別と云ふて始め春秋
を主とし諸書に徴引を繇と繇を別と云ふて皆春秋繇と
曰ふ故なり其詮次の先後小至ゆては茲として辨ふるこ
を無し梁此文思博く春秋緯を要て猶三十卷あり今惟
ふ隋此經籍志十有三篇此目あり演孔圖元命苞文耀
鉤運斗樞咸精符合誠圖考異郵保乾圖漢合華佐助期握誠
圖潛潭巴說題辭是也記と記せゆ如し此等此緯書ども
今を全書一も傳はらば諸書に徴引せゆを拾ひ集めて同
書不出せるを見ゆゆめ外あり此考ふ就てを往くち多此
引用ふゆ事此有る故ゆゆば其由來を記ゆゆち多此
命歷序そ此記者詳然らば最末の條魯哀公十四年謂
也依獲麟歳とゆ二百七十五年ふして漢起れる事云
ぬ文何也後漢此歷志和帝元十四年の詔文考靈曜
命歷序皆有甲寅元と云依を始往く引用しぬま前漢
此世成まる物依こ著く其體裁を察依ふ此を甚古

く聞えし。易歷と云ふ書を本や爲し。他書をも採合せて記
せゆ物よあむ有る依。蜀此譙周晋此皇甫謐梁の蕭吉等書
書よも往く引ちて其易歷てふ書の趣を古微書よ洛書摘
用せる事あり。引ちて其易歷てふ書の趣を古微書よ洛書摘
六辟此殘文字舉する中所見ぬめ其文小孔子曰洛書摘
六辟曰建紀者歳也成姬昌有命在河聖孔表雄德庶人受命
握麟距宋此羅泌路史小摘亡易歷曰陽紀天別序聖人題
録興亡州土名號姓輔爰符亡殷者紂黑期火戊倉精受命女
正昌效紀承餘以著當孔子曰著當と云まで易乾鑿度
徴よ作受授不誤次是氏没六皇出天地命易以第絶
云次民氏没始穴處之世辰放大頭四乳號曰皇次屈出地敦
終也六皇此下人數者也

辰放次屈之名也。駕六飛麟從日月。飛麟獸有翼能飛者也。治二百五十歲と云。此古微書に出せる全文也。今著當文此鄭玄が注より同じ然る古微書に此文を何今是を考ふ書より出せと云ことを云はるを遺憾也。孔子此語を摘六辟より引る。易歷曰を引るまを其古史を知らず。然るも其識文中に殷紂王の事を云はるは更れ也。倉精受命と云周文王が云はる語をば。殷此盛世。周のち微く多味頃より記せる書れる事は論ひ無し。凡て識緯此書類を易理に倚り。曆法に因りて後世に必ず有べき事を未然に考ふ知る事を專と載せる物あり。中より斯はり符符の眞識も無き非は多くを秦漢の頃より出し日者ら其事此既小有し後其識文を記して未だ然の識書に託せはるが多し。孔子も信じて難於物ふハ有まど此摘六辟及び易歴はしも孔子も信じて引用し鄭

玄宋均等が注さず有まむ。古眞識取るよ疑ふくれむ。ちて其識緯此書等。そ此識文ふを眞實あまど其小就て記し出せる古人の履歴及び道紀の傳説れども。却て經史此類に漏せはる。故實此眞文。其間不錯在次まは。邃古此學好むむ人。熟く擇びて取用はるき物あり。然れむ漢世に聞え高る董仲舒鄭玄あど。其説の眞實を擇ばはる廢斥する事とありて。隋煬帝と云はる。其時天下此家の識緯此諸書を藏せはるを惡みて。煬帝と云はる。其時漸く此命歴序の殘缺を古微書に首記せし。是を謂ゆる天此未斯文を悉さばと云物あり。ちて其易歴此體裁を思ふ。此命歴序の第三章を正。第十四章はては文。其古説此殘文はるを所思るを。上此摘六辟

小引多る文を合せ考ふは、天皇氏と曰黄帝小至は、十二
辟は古傳説は、易讖字作正合せし書は故は、易歴を名け
たや聞え、洛書摘六辟てふ書を、其十二辟は中なる、次是氏
は次は、辰放氏を云はと、黄帝まで六辟の傳を摘取して、
洛書の讖小合せし書なる故は、かく名けし物と聞ゆ、然る
は上より引とは文を、下は五辟の缺あるは、辟字を爾雅は
之を見え、孫穀が言も、此蓋祧諸帝矣、而端于茫眇、
之代間取、其道徳尤玄者、斬于六君云と言ふ、斯て今は
命歴序を、其易歴を專を取りて、天皇氏と曰次く、命を受
て王者と爲まる諸辟の、歴序を記せは義字以て、號けし書
名を聞えと、此を前ふ、別は春秋命歴と云ふ書ありて、
其序はる故、かく云うを思ふまど、然るを

非ざ、はて如此考定めて、章を逐ひて徴し辨ふは、黄帝
は往は、太古は年歴いや詳ふして、諸史は載せる古王者は
世數、その紛錯荒唐は極は、雜説も、一切は掃除せらはま
む、今是一字擧げて其百を廢し、殊に考究あるを、本文の
毎下は述るが如し、然るは其文義を注するは非ざ、と但
し是は就て先論ふべき事あり、其は古昔は事實を撰集せ
は書は多加は中は、司馬遷が史記は古けれど、黄帝を筆
を起せは、其以前は傳記は雅馴あらは、迂怪は説多は、
嫌なりと聞え、其とし史記の自序は粗見え、五帝本紀
載、堯以來、而百家言、黄帝其文不雅馴、薦紳先生難言之云、
也云、は、爾て知る、斯て史記は採まる、堯以前は事の本説

ぞ所思ゆる説の諸書は散見あるを史記の文と合せ見る
 よ其儒意は合ざる事を不經と為れと見えて多く省死
 捨てぞ有るは論其を別よ著せる書然るは三国此時よ蜀此
 等ふをり論ふを見て知べし
 譙周を云ひしは黃帝以前をも考す記せり謂も依古史考
 是邪然れども其書早く滅びあり諸書ふ引ふるを拾ひ
集めて近頃渡まる平
 津館叢書を云ふ物よ收其後よ西晉此皇甫謐が帝王世紀
 とるを見るをり外あり
 あは此庖犧氏を記し始れ初を聞えよ同世小王嘉
 が拾遺記と云ふ物有て黃帝以前此古説をも載せり此
書
 は珍しき古説の往々見ゆる物あり例の迂怪コレ
 ぬ依事有てとて狡意は依儒者らは嫌ふ物あり此をコレ後
 ふを唐此司馬貞が三皇本紀あり此を史記よ黃帝以前を
 取ら依事を憤て包犧氏女媧氏神農氏此事を紀しコレ因よ

天地人の三皇はと其餘の諸氏此名をも舉とる故ふ補史
 記と題せり此人此史遷が記よ三皇多缺とるを憤れるこ
と初免の按ふ三皇已還載籍罕備然君臣之始
教化之先既論古史不合全闕近代皇甫謐作帝王世紀徐整
作三五曆皆論三皇已來事斯亦近古之一證今竝採而集之
作三皇本紀を云依よて知る然れ
ぞ其撰ひざは未しく鹿き物あり此後ふ北宋此世よ司
 馬光が資治通鑑あまど其を周平王と記して其以往を
 むらし措とて爰よ劉恕が通鑑外紀蘇轍が古史あど云ふ
 物あり然るは司馬光そ此外紀よ驚さま初を覚えて劉恕
 が死する後よ別り周以前の事をも撰びて稽古録と云ふ
 書を著せり劉恕を司馬光が通鑑を物ある時よ其撰
者よ加はれる人あるが中途おして死れり外
紀を其私よ作れる書あり按ふよ通鑑の撰を司馬光摠裁
として作ら依故り劉恕が意ふも任せざる事あり故ふ

別よ外紀を撰 ちて此三部之凡伏羲氏と巴筆を起せるが。 せはあらむ。 共小其撰の麓交中。唯外紀此み。盤古氏と。包犧氏ま て此世くをも。自註不粗く舉とまど。古氏を更だ巴。稽古録 よも。其大古此世く。此事實を取らば。斯て稽古録は伏羲之 知也。如天皇地皇人皇有巢之類。雖於傳記有之。語多迂怪事 不經見。余不敢引。獨據周易自伏羲以來敘之。云予以此 儒者此例の偏見。元と巴論。亦見る。足さ。世と。庖犧氏以 前の事を。早く周世の緯書等。も見えて。孔子も既引。用 せり。其をし。取は。じ。は。謂ゆる。周易此繫辭傳。形。伏羲神 農。黃帝。お。どの。説。も。取。る。は。足。ら。ば。其。を。古。紀。緯。書。と。り。を。猶 後。此。物。凡。ま。む。凡。り。殊。小。司。馬。光。の。繫。辭。傳。を。周易。と。稱。せ ます。此。を。周易。を。打。任。せ。て。經。と。稱。し。て。採。用。せ。る。を。總。て。易。の 十。翼。を。こ。凡。孔。子。此。作。と。云。む。傳。ふ。る。漢。以。來。の。俗。説。は。據。ま 巴。と。聞。え。て。甚。陋。し。は。と。其。書。名。を。稽。古。録。と。號。け。し。を。尚。書 よ。若。稽。古。帝。堯。を。や。り。よ。書。出。せ。る。文。字。は。據。ま。り。を。聞。ゆ。ま

ど。緯書此類ある傳記を採らばと云ふ。光が見識を助けて 云は。繫辭傳を更だり。二典三謨も取らば。然るは各々 其書は。發語。若。稽。古。某。と。云。ふ。後。と。り。古。を。追。記。せ。る。物 一。向。小。信。出。る。を。其。世。小。碩。儒。と。聞。え。し。徒。の。然。る。偏。見。を。加。く 偏見あらばや。 せ。は。と。見。え。て。南宋の世は。廬陵の羅泌を云し。人。路。史。ち。ふ 物を撰述せ。是。此。み。目。を。留。る。き。書。よ。て。盤。古。氏。と。り。次。く。 伏羲。神。農。黃。帝。の。世。く。字。經。て。夏。桀。王。が。世。ま。て。を。考。證。せ。り。 彼。固。小。傳。子。し。古。道。を。此。世。限。巴。小。類。廢。せ。ま。む。實。尔。も。尤。凡 終。あ。巴。然。る。よ。此。人。信。じて。古。を。好。む。心。の。厚。き。と。り。覺。え 丹。壺。記。と。云。ふ。物。を。信。用。せ。る。過。失。は。殊。に。大。凡。り。今。此。考。を 物。を。多。く。其。路。史。を。對。して。論。ふ。故。を。ち。る。過。失。を。有。れ ども。ま。た。此。書。は。り。博。く。委。曲。に。攷。覈。せ。ば。有。こ。ち。て。此 也。無。く。其。餘。此。史。類。を。今。の。對。攷。り。足。ご。ま。む。あ。り。 ち。て。此

同頃よ新安朱熹と云し人か此資治通鑑を增益して通鑑
綱目と云ふを著し其後明世ふ至りて通鑑綱目前編れど
有也其司馬光朱熹らぐ趣意よ本邦に依撰おまぞ粗太
古此事攷め載せりよと同世尔李純卿と云ぬぐ草創せる
世史類編よ王世貞を始め後ふ出たる儒輩れ己が向く訂
補せぬ綱鑑の類亦依史ども數有也然れど上代此事はみ
れ路史を抄録して其間よ他れ傳説をも撫ひて補する物
也其綱鑑どもを視るや後尔撰べるやど後此事よ精け
れど古代此事よ次くは例の儒見を用ひて故案を
失する説ども多あり然れは古の史類編を其祖書なり故
れ古説を多く傳りて有る然るに其類編の有るや其
古代の事案を大抵路史を其終に取おくも其由を云ざ依
る最のち死無し然るに其書廣漠ふ有きと路史れ古を

考證せる勞死よ比るて其功半尔ぞ當るべきよ其よ
り後の綱鑑を世史を採れる物おまむ羅泌が勞を誰も得
知らばぞ成る故今少その由來を述べて世に此史を加
て羅泌が功を世に知しむる物なりけりて世に此史を加
く區く依るが故尔今一書よ據りて古昔れ眞を察ぬるを
能はば是を以て古人撰史れ法尔働ひて諸書を拔萃して
新よ本文を作れ我が所見を自注しよ赤縣太古傳と號け
る也蓋こた先師れ神典学よ本基せる事を云ふも更なる
也云る語をも学則と斯て其太古傳亦依黄帝以往此年歷
世數を一向よ此命歷序依易歷れ傳よ據るまむ今殊り
標して命歷れ誕妄を辨じ其易歷の錯亂をも訂正せて
得有はしく成ふとめ然るに此を太古傳れ開題をも云る

くや。見む人よ其意を得て在^レ法^シ。百八十^レの^ト言^ハむ^ルて大君よ。けく^レる道の^ニぬ^レを時^カまし。

一 自^リ開^闢至^テ獲^麟。二百二十七萬六千歲。分^テ爲^ス十^レ紀。每^レ紀爲^ス二十六萬七千年。凡^ソ世七萬六百年。一曰九頭紀。二曰五龍紀。三曰攝提紀。四曰合雒紀。五曰連通紀。六曰序命紀。七曰循蜚紀。八曰因提紀。九曰禪通紀。十曰疏佗紀。

是^レ第一條は。固^トと^シ信^ラら^ズま^シぬ^レ説^ヲあ^まぎ^ズ。世の通説と成^レこれ^ト。バ^モ黙^レ止^メの^トこ^ト。今其^レ妄^ヲ辨^ズ牙^ヲむ^ス。先^ニ開^闢を^シ。天地初判の時^ヲ云^フ。獲^麟と^ハ。春秋魯哀公^ノ十四年^ニ下^リ。西^狩獲^麟を^シ。ゆ^ニ年^ハ此^ノ事^ナれ^ル。然^レる^ニ。開^闢を^シ其^ノ年^ニまで。二百二十七

萬六千歲^ヲゆ^ニを^シ。十^レ紀^ハ分^ルと^シ云^フ。人^ノ皇^ノ氏^ノの^レ世^ヲ爲^ス九^レ頭^ノ紀^ヲ。其^ノ一^ト爲^スぬ^レは^レ何^ノぞ^ヤ。然^レる^ニは^レ人^ノ皇^ノあ^リ開^闢初^ニ出^ルれ^ラむ^ヤ。前^ニよ^シ天地^ニ皇^ノ立^ビて^在り^{。尚}其^ノ上^ニ盤^古氏^ノあ^リ。下^ニよ^シ出^ルる^ニ本文^{。及}び^三五^ノ曆^紀始^ニ學^ノ篇^ハれ^ト。實^録ぬ^ル古^ノ傳^ハ此^ノ歲^數ヲ^據れ^ル。開^闢を^シ人^ノ皇^ノ氏^ノまで。あ^リ三^萬六^千歲^{あり}。然^レゆ^ニ此^ノ措^ヲま^テ。人^ノ皇^ノよ^シ開^闢の^レ初^ニ發^ヲを^シ係^トゆ^ニ。鹿^ノ畧^ハ非^ズ也^{。但}し^此を^命歷^序ハ^ミ此^ノ事^ハ非^ズ。下^ニ引^出も^{。其}積^年の^レ數^ハ。補^史記^{。帝}王^ノ世^紀。ま^と路^史ハ^引と^ぬ説^ハ。ま^との^レ歲^數あ^まぎ^ズ。其^ノ鹿^ノ漏^レこれ^ハ準^ヘて^知法^シ。儲^ハと^二百^二十^七萬^六千^歲を^シ。十^レ紀^ハ等^分して^ハ。每^レ紀^ハ二^十二^萬七^千六^百年^と爲^ス。每^レ紀^ハ爲^ス。二^十六^萬七^千年^と何^ノぞ^ヤ。

引く書等も此十字れし然まむ此を無
算の人此加筆取らむも知るのらび
年とある年を疑ふ世字を誤れる也
作るよてけて今叙り諸書よ此類説此多のゆを取竝て
知るべし
論はむる先三皇本紀春秋緯稱自開闢至于獲麟凡三百
二十七万六千歳分爲十紀王世貞綱鑑春秋元命苞曰天地開闢至春秋魯哀公十四年
獲麟之歳凡三百二十六万七千年分爲十紀とあり春秋緯
稱とを此元命苞を云々と思ふ其歳數差牙まむ此を命
歴序を二書を合せて凡世七萬六千世三百二十七万六千
春秋緯とを云る有けゆ由取也一曰九頭紀二曰五龍紀三曰攝提紀四曰合
雜紀五曰連通紀六曰序命紀七曰循蜚紀八曰因提紀九曰
禪通紀十曰疏仡紀蓋疏仡當黃帝時制九紀間是以錄於此

補紀之也と載し文献通考よ此説多出して古微書よ今此
其説荒誕故亡取焉と云り
本文の所系按博雅天地辟設人皇以來至魯哀公十四年積
二百七十六萬歳分爲十紀注云帝王世紀自人皇以來迄魏
咸熙二年凡二百七十二代積二百七十六萬七百四十五年
分爲十紀と云ひ路史よ引とる元命苞此積年小據まゆ獲
麟以前人皇まで此年數れり七百四十五年と云る數も獲
麟以後曹魏の元帝と云ひ咸熙二年までの數あり二百
七十二代と云る人皇と云元帝は禪通紀よ至る百二十九
姓引く路史の謂ゆる九頭紀と禪通紀よ至る百二十九
を即世紀よ從牙ゆあり是を以て注よ其説を引ぬり路
史此餘論よ春秋命歴敘自開闢至獲麟二百二十七萬六千
歳分爲十紀漢嘉平中沛相計椽陳晃上言曆元不正謂自開

闢至獲麟凡二百七十五萬九千八百八十六歲故易乾鑿度
春秋元命苞云二百七十六萬歲每紀爲一十七萬六千年廣
雅因之均爲誕妄乾鑿度此全書也今傳はまど此文ある古
微書お拾ひ入ある元命苞も此文ある
共漏落と按禮含文嘉推以上元爲始起十一月甲子朔
旦冬至日月五星俱起牽牛之初是爲曆本故鄭玄云上元者
太素以來所求之年也唐李淳風推自麟德元年甲子上距上
元甲子積纔二十六萬九千八百八十載而僧一行以大衍數
推上元甲子積距開元甲子亦止得九千六百九十六萬一千
七百有四十是其日數也然則太素以來之年從可知矣僧一行
推とる積數也即李淳風が推とる二十六萬九千八百八十
載の日數ある由あり此二人が曆數は名高きこと人の能

く知る所あり然れど此をみぬ案數お合は
る物あり其由を末論ふを見て知るべし 夫一十九萬
一千八百四十歳而反太素冥莖此道之根本也唯願於曆數
之理者能知之邪と云乎此說よと本史人皇氏の傳此所
よも出せるが其所を二十九
万一千八百四十歳をありまよと上小每紀爲一十七萬六千
年と云る文を一十六萬七千年とあり共よ同人此説よし
てかく齟齬せぬを何ぞや然て此節ある唯字を本小二所
共よ推字おまど此は誤字れるおと疑ひ無れば己が意を
もて改りて右諸説の紛々を其從來を如何を考ふあり
其原を殷西伯が妄意よ出で古傳此實數を一扱もれく後
次よ出し徒れ古説を固く守るこを能はま其實數を攷
覈するまや能はま其臆よ取りて尚種く推法を立おま
其術をもて己が向く推定知と係數れる故りかく區くれ

依此也。此妄數也。西伯姬昌より起まる事也。然れど羅
泌が。右等此諸説を廢斥せ依論を信し理とす。然るも其已
の出せる。一十九萬一千八百四十歳を云ふ數も。古傳孔實
數れられど。殊れ一推法此定形ること著し。然てハ共
五十歩五十歩よて。互り孰多劣とも。笑ひ難ま誕妄あるを
也。抑かゝる推法ども。の起りて。唐堯より始まり。其より周の
子。曰とて。求卦主歳術よと推。即位術はと聞え。乾鑿度よ。孔
と求。水旱術れど云ふ術ども有り。然まど皆論ふよ足ざる
空考。考の說等あり。○後よ禮斗威儀を見まど。天運二十九
万一千八百四十歳。而反大素冥莖蓋乃道之根也とあり。然
れを一十を二十の誤写あるが。 けり其歳數ぞも此信用不
羅泌は是妄數を信ぜしれり。 足ざる上を。謂ゆる十紀の名も信用不
足ざる上を。謂ゆる十紀の名も信用不

已。然るを路史よ。甚く之を信じて。昔者太極泮。而渾敦氏職
焉。渾敦氏逸。而二靈作。二靈後。乃有十紀。疏佐之紀。自黃帝始。
其歳之遠近置而勿論可也。略條列於右端と言ひて。一九頭
是爲一姓紀。真源賦云。人皇猷倦塵事。乃二五龍是謂五姓紀。
真源云。五姓乘雲車。而三攝提是謂五十九姓紀。孟詵。錦帶前
治。天下時。人穴處巢居。紀。大史公言。九皇氏没。六十四氏興。而三皇興。是
也。謂六十四氏。蓋併五姓而言。而所謂三皇者。乃合雜之三姓
也。四合雜是謂二姓紀。或作熊。俱非也。五連通是謂六姓紀。或作
六。敘命是謂四姓紀。真源賦云。五姓後。付七十一姓。駕六龍。而
之四也。七。循蜚是謂二十一姓紀。陶弘景云。上八。因提即十有三
姓也。雜書云。三皇號九頭紀。次五帝號五龍紀。次攝提紀。次連
通紀。次敘命紀。次因提紀。次禪通紀。次合雜。循蜚。傳之

爾九禪通是謂十有八姓紀史皇氏之通封禪十疏佐自黃帝
氏而紀司馬貞曰九紀之間豈惟數千百載三二十皇而已哉
而莊周之說易姓而王封泰山禪梁甫者蓋七十有二代其有
形非整堦者千八百餘所然則宇宙之端握符登紀爲萬物之
主者可勝記邪まよ此所の自注よ鄭玄六藝論云遂
二言之教方叔機注云九頭一五龍五提七十二合洛三連
通六敘命四凡九十有一如鄭所言則十紀皆在遂人之後而
四紀又在伏羲之後非也馬綏之徒俱謂十紀通百八十有七
代又云伏羲前六後三各立年歲亦惟取據徐整等爾皆不可
盾とも云有り本文注共よあ不諸書を引よまど今在文成
約免て引よ其む皆論ふ不足ざる訛傳俗説あまバれぬ
け了其本史の據よ丹壺記と稱ふ物を取て予既得丹壺
名山之記獲逆帝王之世乃知天未喪斯文也丹壺書初有盤

古氏天皇氏地皇氏九皇氏而有鉅靈句疆譙明涿光鉤陳黃
神。鉅神。犁靈。大騮。鬼騮。弁茲。泰逢。丹相。蓋盈。大鼓。雲陽。巫常。泰
壹。空桑。神民。倚帝。次民。是爲循蜚紀有號而無世。皇次四世。蜀
山。倏儗六世。渾敦七世。東戶十七世。皇覃七世。啓統三世。吉夷
四世。九渠一世。狶韋四世。大巢二世。遂皇四世。庸成八世。凡六
十有八世。是爲因提紀。倉頡一世。柏皇二十世。中央四世。大庭
五世。栗陸五世。麗連十一世。軒轅三世。赫胥一世。葛天四世。宗
盧五世。祝融二世。昊英九世。有巢七世。朱襄三世。陰康二世。無
懷六世。凡八十有八世。是爲禪通紀。可謂備矣。此予之史篇所
取獻者也。言予本書の文いと迂異よして初学の倫れ
と其意を得はむとく擬はるれど今を其

文を取直して引たり。ほと鈎陳たり倚帝まで十七氏の名
を本は涿光以次至次民氏如下所敘と云て畧せまど見る
小便宜うらむ事を思ひて本史は敘ある名を取りて
出せり。本書と合せ見て己が私に事察めらる。今熟
熟ふ此謂ゆる丹壺記や云ふ物を視ゆる。柏皇氏以下十
五氏を其世數を信らまは。六韜莊子。遁甲開山圖にを
採合せて載ふはよて本據有まを。其由を第十一條柏皇氏
倉頡とゆ上鉅靈や云はて。三十六氏に世次を全信を
然はこれ諸氏に中ふ。黃神。狂神。次民。皇次。皇覃。五氏のみ。
是命歷序に歷敘とゆ易歷に。確乎多は古説の王者ふて。人
皇と柏皇や此間ある世次を。此五氏を止はるまを。下此本
文に註を如はゆる。其間に連はる。二十一氏に名等は。

諸書に某氏と出るるを見ゆる。隨せて採集め。凡そ妄名を
も差加す。名山丹壺とゆ出るは。祕典に託して世を欺け
る。奸人の所爲に依ると疑ひ無し。そは既小生民有るを
隨ひて中よ名に傳えれは多あるを。彼固に古語に某
氏と呼ぶが常れを。諸書に某氏と云名に多く見ゆるを
某氏やだ有まむ。誣ひて王者ありを。考て之を拾ひま
山海經を始め地志に類ある地名に依りて。其名ども或設
け中よ地名も依らで。妄小作れり。見ゆるは少あり
所。今其氏に此出とる書名を。委曲に云むも。易き事
加く云ふを聞は。漏し。其を具眼に事ふ。或は此。路史
氏に杜撰と疑ふ。倫等も有れむ。然まど其全書を熟讀に
依る。亦比類有は。古史學に篤志よて在し。うば。決免て
此人に所爲は非。他に祕惜を字辛く。えり得らむ。固

と信じて古を好む性あまむ。太古此傳記の乏しく。知難
まを甚く索めて探祕侘々侘間。其記を得て。覺えび欺の
れし物あり。達識此人と云ふども。篤く其道を好むと爲て
は。取はおして。然る欺きを受ゆことをも。節いあ
ふ事あり。吾が黨此小。あむ此丹壺記。類多偽説也。古三
墳と題せる書。太古者生民之始也。男女構精。以女生爲姓。
始三頭謂之合雜紀。生子三世。合雜氏没。子孫相傳謂之敘命
紀。通紀四姓。生子二世。是謂連通紀。生子一世。通紀五姓。是謂
五姓紀。男女衆多。分爲九頭。各有居方。故號居方氏。生子三十
二世。強弱相迫。中有神人。提挺而治。故號提挺氏。生子三十五
世。通紀七十二姓。故號通姓氏。有巢氏生太古之先。天下九頭

咸歸有巢。始君也。通姓氏之後也。燧人氏有巢子也。伏羲氏燧
人子也。や云は是れなり。羅泌も既く此説を論じて。大率此書
雖有所取。然淺陋每難据。云や言なり。此書を序者宋此毛漸
胡應麟が筆叢ま。古今偽書考なり。論するが如し。今引
はる文。及どむ。偽妄の殊り甚しき者なり。然れは書中いを
布よ。絶て後人此思ひ寄はじ也。古傳此眞説も交り存ま
故り。路史も往く用ひて。故案を徵せる事あり。偽書あり
とて。一概は捨むを思ひ。抑右紀號此説くを。彼此共り其本を。
後人純杜撰妄誕。出多偽故り。下よ出る易歴此古説や。は。
互に氷炭相反して。此字取らば彼殘捨る。彼を取む此
字捨る。兩用をばじ也。説れるを。彼此共り。此命歴序不載
ある事也。然次が小周代の始とゆ。世り用む舊せ偽説ある

故よ。此をも姑載し遺せりと見也。然まぎぞ予は。其眞字擇びて。固く之を執依者れまむ。次く出せ依彼古説を取めて。此紀號れ偽説をば。廢斥次依あや右れ如し。淑人よく察する。そ純眞を擇びぬのし。

二 古昔天地未分混沌。如雞子。盤古氏生其中。萬八千歲。天地開闢。清輕者上爲天。濁重者下爲地。盤古在其中。一日九變。神於天。聖於地。天日高一丈。地日厚一丈。盤古日長一丈。如此萬八千歲。天數極高。地數極深。盤古極長。數起於一。立於三。成於五。盛於七。處於九。盤古氏夫妻會易之始。陶鎔造化之主。天地萬物之祖也。盤古氏之後。乃有三皇。此天地人之

始也。

此一條元とゆめ今れ命歷序ふ出ぬ依文尔を非だ。彼因れ古學を爲と依人た。誰も見知めて在らむ。先秦れ博士徐整の。三五曆紀の文尔て。諸書よ引ぬぬ。互よ文の精畧ある。多博く校合して出せ依あり。然依を此文もを疑あく。易歴れ古説れ巴志。三五曆紀尔採らむ。後よ本書れ逸せ依故よ。後世是文字引くよ。三五曆とれみ引らむと所思る。あや。次節尔云ふ如く。う於此ふま於此文無ては。歴數の本基立げまむれ。見む人異みを爲こを勿ま。三五曆紀を。諸書を引と。る。文等を視依よ。易歴れを始め。太古より傳はる古傳説よ。本於て。盤古開闢此時と。三皇五帝此年曆を紀せる。

書れりしや聞ゆるを彼臆断の推術説よ於し消れてや有
耳の僅よ此文まよ次節より引く文あど此諸書より引存する
も書とまよ今ハ紀と有るを用ひ於説郭尔を徐整長曆と
引あり然も號
ひしよこそ

三 天地初立有_リ天皇氏十二頭。澹泊無_ク所施爲_ル而俗自化。木德
王歳起攝提_ニ兄弟十二人立_テ各一萬八千歳。地皇十一頭。火
德王_一姓十一人興_リ于熊耳龍門等山。亦各萬八千歳。人皇
九頭乘雲車駕_ニ六羽出_ル谷口。兄弟九人分長九州各立_テ城邑。
凡_一百五十世合_テ四萬五千六百年。

彼二皇本紀小庖犧氏女媧氏神農氏を二皇と立_テ多_ク未_レ小
一説二皇謂_テ天皇地皇人皇爲_テ二皇既_ニ是開闢之初君臣之始

圖緯所載不可_ク全棄故兼序之也云_テ此純本文也。一字も差
はぬ字記し出_テ其自注よ。出河圖及_ニ三五曆也と云_ハ。然れ
む此此本文も河圖及び三五曆を採合せて載せ_ル説_ハ如_ク
のを思ふ_ル然_ルを非_ズ彼此共_ニもや易歴の古説_ハ如_ク也。
彼_レも此_レも採載せ_ル後次_ニく_ニ。文飾_ハ此語_ハと後人_ニ純
注文_ハおぞ混入_シて。右_レ如_クは成_ルる_ハ形_ハ。司馬貞_ハ此_レ命
正_シしと見_エて其書中_ニおそを引_テは_レ文_ハ有_ルこと_ハ如_ク偶_ニ命
命歴序_ハを相_シ似_テ多_クも能_ク見_レれ_ル也_ハ皆別書_ルる_ハ也_ハ其_レ三皇
の傳_ハはさ_ニよ_ニ今_ハ此_レ本文_ハを同_シけ_ルま_ニど_ニ案_ハお_レ故_ハ今_ハそ_レ此_レ同_シ文_ハ也_ハ諸
を河圖及び三五曆を採_ルる_ハ如_ク也。故_ハ今_ハそ_レ此_レ同_シ文_ハ也_ハ諸
書_ハよ散見_ル也_ハ如_ク聚_メて之_ハを按_テせ_ルむ_ハ也_ハ項_ハ竣始_ニ學_ル篇_ハ也_ハ。天地
立_テ有_リ天皇氏十二頭。號_シ曰_ク天靈。治_ル萬八千歳以_テ木德_ハ王_ニ地皇十

二頭治萬八千歲興於熊耳龍門山。人皇九頭各二千三百歲。依山川土地之勢裁度爲九州各居其一方。因是而區別也。見始學篇此全書今傳はらば項竣と云ふ人の傳よと詳あらば此文を唐此徐堅が初學記及び路史まると古微書に引よるを校合して再引ぬり三五曆紀尔溟滓始牙濛鴻滋萌歲起攝提元氣肇啓有神靈人號天皇一人十三頭有神人一人十一頭。號地皇一人九頭百五十六代合四万五千六百年とあり。此文を五行大義初學記路史注事物紀原說郭其今此等餘の諸書よも引よるを校合して引よるあり。此說を合せて本文を攷ふ依よは於天地初立の下よ。三五曆よ依り多。溟滓始牙濛鴻滋萌歲起攝提元氣肇啓也有る十六字を補ふるし。斯て澹泊無所施爲而俗自化と云依十

字を決然て後人此意と加すし文あり其はかく様此事を後此葛天氏朱襄氏外ぞ此世頃ふあそ微妙な事よ云む囉虫べ此事外も三皇の世よ中くよ卑しき事外也此を古意を得とらむ人々自の履ふ知る事外れむ委とは云は殊よ此皇の施爲せる所此大なること此俗ばありの然少けき事よむ非びくし其を大古傳を見て知るべし。まむ此十字を去て此間よ始學篇此號曰天靈以木徳王とあ依以字をゆ上五字を補ふるし此大抵四字抄ありまよ歳起攝提とある攝提字疑あく後人の校意よ改めし外也其たま於攝提を攝提格此畧語なるが寅此異名ある由尔不爾雅よ此名此みららび干支此異名を皆載多まど元

とゆ信られぬ名等あると。明に張鼎思の説の如し。其説
邪代醉編に、歳易、歳名見于爾雅。郭璞曰：未詳。楊升菴謂：簡闕
之古莫如典謨。其次易詩春秋。然尚書辛壬癸甲。易先甲後庚
詩吉日庚午。朔日辛卯。春秋紀年昭然。不紊。意當漢世術家創
為此名。藏用隱字。以神其術。而後人竄入。爾雅堯舜三代恐無
是。稱謂也。愚謂此等異名必起于周末。如攝提孟陬。己見楚詞。
矣。陳氏世編。司馬貞索隱。皆收于天皇氏之下。何天皇之時即
有此名。尤謬。淮南子天文訓中。紬解其義。惟以月令為主。支干
配合而言。爾雅又有月易月名。大抵歲名月名。雖不可解。而干
支紀日。不紀歲月。則詩然耳。然耳。然耳。後漢書此歷志。二所
書可攷。と見えとゆ。然耳。然耳。後漢書此歷志。二所
て。命歷序有甲寅元也云。又語有まど。今本ふ其語見えざ依
ち。攝提字もや甲寅と有しを改むる文字あると疑無け
れば。此に甲寅此二字は復たあるし。まど按て依よ。攝提格を
攝提とむり云てち別
よ。然る星名あるふ混はしく。案よち關逢攝提格と云はて
ち甲寅ふち當らば必を只ち字を四字よ。古史のしく整ち
て。命歷序有甲寅元也云。又語有まど。今本ふ其語見えざ依
ち。攝提字もや甲寅と有しを改むる文字あると疑無け
れば。此に甲寅此二字は復たあるし。まど按て依よ。攝提格を
攝提とむり云てち別
よ。然る星名あるふ混はしく。案よち關逢攝提格と云はて
ち甲寅ふち當らば必を只ち字を四字よ。古史のしく整ち

む事を此み思ひて。然る謂まど。ちて。下よ取總て云ふ如く。兄
でを深く思わざゆしよあそ。ちて。下よ取總て云ふ如く。兄
第十二人立各一此八字也。後此攬文あまを削り去て。萬八
千歳此四字を存せざし。其ち前條よは二所とも。唯ち萬八
千歳とありて。一也云ざ依ち古文
と聞ゆるも。ちて地皇此所尔。火德王。一姓十一人。や有る
思ひ合せべし。ちて地皇此所尔。火德王。一姓十一人。や有る
ち。後此攬文れゆ。其は始學篇よ。天皇氏を此み。以木德王也
云ひて。地人二皇。其德字云也。ち王也稱せ。是ぞ古傳
此正實なる。然るを本文及び次條よ。地皇を火德王也云依
ち。五運相承此事を思ふ。後人此加筆あること著し。そは
太古傳尔委く云ごせく。地皇やがて天皇氏此姉妹よて。同
時此出興よあや有ま。別よ在治せ依よ非ざまを。以火承木

之云不謂は無も此字也。例を云はく。伏羲氏も木徳を以て王あるも其婦妹とる女媧氏も同じ木徳ありしを思ふを。其の第十條は論ふを合せ考ずて悟ゆべし。按て依る。五行大義云。三五曆云。有神人十一頭。號地皇。帝系譜云。地皇以火徳王也。有ゆ。是に依れむ。三五曆も。地皇の火徳を云ふ事なく。帝系譜も。始て云ひ出志語を依る。本文より取りて加す。也也。けり。その三五曆よ。めし此語有。形むを。斯は。儲は。多五行大義云。春秋命歷序曰。人皇九頭。宋均注云。兄弟九人。洞紀云。人皇分治九州。古語質。故以頭數言之。とあり。然れむ。人皇の所。兄弟九人。有依を更あり。地皇一姓十一人。之云む。天皇。兄弟十二人と有依も。宋均注を。後人の和

さむ。本文に據入せる。と著明あり。初学記。始学篇の天皇十三頭と云ふ文を引とる。下。洞冥記云。一姓十三人也。之あり。是も始学篇云。人敷を云けり。故。洞冥記を引とる。あり。地皇は。一姓十一人と加とる。此。文。効。行。の。合。依。べし。儲。あり。此。ら。此。字。等。を。加。す。て。は。例。此。四。言。の。句。は。合。さる。故。も。兄弟十二人。立。各。一。万。八。千。歳。と。十二。字。は。句。を。合。せ。ま。す。地。皇。は。所。も。兄弟亦各。萬。八。千。歳。を。為。す。む。兄弟。此。二。字。を。脱。然。れ。む。地。皇。は。所。有。火。徳。王。一。姓。十一。人。此。八。字。を。去。して。此。所。有。世。史。類。編。形。依。號。曰。地。皇。と。有。依。四。字。を。補。ふ。法。也。其。は。天。皇。氏。の。文。は。號。曰。天。皇。と。有。る。と。對。ふ。は。て。頭。を。宋。均。が。言。ふ。古。語。質。故。以。頭。數。言。之。を。云。ふ。如。く。十二。頭。と。云。ふ。は。即。十二。人。と。云。ふ。語。也。是。亦。既。ふ。語。足。依。を。再。十二。人。と。云。む。重。語。あり。況。て。此。を。兄弟。有

ら。洛書靈准聽。よと水經注れども。地皇面貌皆如女子。而相類也。も。人皇九男相像とも有りて。其分身なり物字也。然を後よ作まる史等よ却りて幾頭や云ふ語を除きて。兄弟若干人と云ふ語をのこ存せるを無識と云ふは。委く太古傳よ就。けり其頭を云ふ。人皇九頭も異説無きや。天地二皇を。本文及び三皇本紀。天皇十二頭。地皇十一頭。有る字。三五曆。天皇十三頭。地皇十一頭と見え。始學篇。天皇十三頭。地皇十二頭とあり。此は孰う正説なり。云ふ。三といひ一や有る。皆古に誤寫を承るあり。其は水經注よ。開山圖を引きて。天皇十二人分五方爲十二部とも見えて。十二や有る。正數なり。斯く地皇を其。后れ

まむ。分身次也。も。二皇必同數。然るべし。道理也。是も十。二や有る。正と爲べし。然るを路史よ。天皇十三頭。地皇十。秋緯言。天皇地皇人皇皆九人分爲九州。長天下。故河圖括地象云。天皇九翼。蓋輔翼者九人。易通卦驗云。天皇氏輔有三。各注云。三輔公卿大夫也。三輔九翼併皇。是十三人と云。依。固より分身此義を知らず。云。依説を論ふ。足は。春。秋緯と引多。保乾図。引る。古微書よ出。る。文を見。州。皆。字。あ。く。説。郭。引。と。依。も。天。皇。地。皇。人。皇。兄。弟。九。人。分。九。州。長。天。下。也。と。有。り。て。兄。弟。九。人。云。く。人。皇。よ。此。を。係。り。て。上。此。二。皇。よ。も。係。る。依。文。よ。は。非。ざ。依。物。字。や。け。り。人。皇。此。所。れ。る。乘。雲。車。駕。六。羽。也。雜。書。小。據。云。羅。泌。云。乘。雲。祇。車。駕。六。提。羽。也。改。多。依。不。從。ふ。也。本。此。如。く。よ。て。文。句。も。合。は。ば。は。と。文。義。も。通。え。は。り。次。尔。兄。弟。と。云。く。り。城。邑。と。云。は。て。十二。字。は。路。史。よ。雜。書。を。引。と。る。が。兄。弟。云。く。を。更。あ。り。各。立。城。邑。れ。と。云。ふ。も。當。

昔此有様小叶は祚祿後人の文飾れ削り去るし。次よ凡
一百五十世を云。人皇此子孫也。然ばのり相續して世を治
と依義あまど。此は下よ出る。人皇氏没。征神次之と有。依正
文よ合は依。荒唐此説ふて。取るり足らば。然て此世數の取
依り足ざる上を。合四萬五千六百年と云。依歲數此。取る小
足は依事は云ふも更取り。然まを凡字より下十四字みれ
削り去はし。路史注。三五曆云。人皇百五十六代合四萬五
四萬五千六百年を謂也。小司馬取之不足稽也。といひ。於此
を同史も引る。眞源賦。人皇兄弟九人。四萬五千六百年
とも云。已然まを今此本文。三五曆。眞源賦。此と著あり。説
りて後よ書加。牙し。易。歴此古文。然と著あり。説
郭。此ある。人皇氏の傳を載せて。尚書。璇璣鈴を云。ぬこそ
謬。れ。各。立。城。邑。と。云。り。以下。の。文。あ。き。を。古。傳。の。本。色。れ

所る思くぞ。けて此、歲數の取依よ足るを。天地二皇此萬八千
歳も。取依よ足らるるを云ふ。此ハ正し。古傳ふて。諸書
小異説ある事れ。殊尔歴年此。實數小も符合次るよ。伏
義氏の所云ふ如れまを。人皇の所なる歳數の類非。
た。異説此如く聞ゆ。路史不引。眞源賦。萬八千
餘年と云ひ。三皇經。二萬八千歳と有。耳れま。二を一
此誤写。亦も有。る。萬八千餘年を云。ぬ。共よ。曆元。合さ
まを。據。ぬ。よ。足。ら。ば。其。を。第。十。二。條。伏。義。の。所。り。云。ふ。を。俟。ち
る。但。し。其。萬。八。千。歳。は。天。皇。氏。此。萬。八。千。歳。畢。り。て。地。皇。氏。よ
と。萬。八。千。歳。を。經。ぬ。依。義。尔。は。非。也。路。史。よ。引。と。依。河。圖。及。び
帝。系。譜。小。天。地。二。皇。俱。萬。八。千。歳。と。云。依。如。く。此。は。夫。妻。よ。し
有。ま。を。二。皇。相。偶。び。て。是。歳。數。を。歷。と。る。義。あり。然。ら。ば。人。皇

氏此歳數のみ。其古説は無のを言ふ。彼始學篇よ。人皇九頭各二千三百歳を云。依歳數上二皇此歳數の萬八千歳亦依多少相應じ。り於下不論ふ歴數も叶ひて。荒唐れらぬ。是ぞ古傳此實數形ゆ。依但し三千三百歳と云ふは古微書より引とる文は依まる事形る。初学記より引あるは三千此字を脱せり。路史引と依れども此二字を脱せ依所あり誤りて其字正と勿思ひあふ此條此論の結び。次條より云ふを見ゆ。後し。

又曰天皇氏以木王地皇以火紀人皇出暘谷分九河依山川地土之勢裁度爲九州謂之九圍各居其一而爲之長人皇居中州以制八輔。

此條はもや疑あ。前條を一連此文形る。本文舊注錯亂

せらよ。後人此他書成も攙入せ依とゆ。かく別條此如くを成ま依物れ。かくて本書よ分九河の下よま。人皇氏のそを共不行形る。と著はま。其由を。路史よ。天皇を紀よ。至依十一字を。帝系譜云を引。人皇出暘谷云。此文を命歴序云を引。羅泌が見多依本。めし今本此如くは。一連此文を二書よ分。然を云。依非。然ま。此十一字を。其ゆ後れる人。此帝系譜を取りて。加予し文形る。明あ。地皇よ火徳を云。依も上よ論。帝系。故去。此十一字を削去れ。又曰人皇出暘谷を。然依。此七字を本文非。前條の出谷口と云。下よ在。當昔

此小注れる哉。諺めて本文よ連書せ依る也。其又曰、有字此文ありしこ、ち分九河を云とゆ以下を本文れり。小字を分明れ也。此は上カ始學篇形る。人皇九頭各三千三百歲。依山川土地之勢。裁度爲九州。各居其一方。因是而區別の文を併せ見依。各居其一を云はて。互り文此出入こそ有れ。共古説此元文と知る。残而字とゆ下十三字此文餘れゆ。故爰路史を取て攷ふ依り。雜書云。人皇兄弟九人分長九州。已居中州。以制八輔。と云る文あり。凡て路史よ雜書云と引とる。と見えたり。此文も即其書れり。然まどく洛書灵准聽を今を其書傳はらぬ。尤詳よを知るとし。然まど前條此兄弟九人分長九州と云依は更形り。此條も而字とゆ以下の

文也。此雜書に依りて。羅泌とゆ後形る人此作加予し文依依ると灼然あり。其羅泌が見とる命歷序よも此文有。形むよを其字於て。雜書とを引まじき。あや、既よ云ふ。ちて如此く考定免て。前條此條及び始學篇。三五曆世史此文をも合せて綴り見依り。元書易歷此古文也。決免て。天地初立。溟滓始牙。濛鴻滋萌。歲起甲寅。元氣肇啓。有天皇氏。十二頭號曰天靈。以木德王。萬八千歲。地皇亦十二頭號曰地靈。興于熊耳龍門等山。萬八千歲。人皇九頭乘雲。祇車駕六提羽而出谷口。又曰、人皇出暘谷。分九河。依山川土地之勢。裁度爲九州。謂之九圍。各居其一。因是而區別。各三千三百歲。之ぞ有る也。谷口暘谷を同所の異名とて。即扶桑神州の地各れり。九州をば赤縣州と稱ゆる九州を云ふ。

非矣。世界此大九州を云ふ。其をちて路史に注文。雜書太古傳不委く徵矣。依字見るべし。適三辟云。人皇別長九州。離良地精。生女爲后。夫婦之道始此。又見春秋命歷序。有まど。今本よ見え。古微書不。此文多。雜書靈准聽と舉と。不審。依事。不。殊。不。適。三。辟。と。云。誤。此。を。摘。六。辟。を。誤。ま。る。あ。ら。む。

皇伯。皇仲。皇叔。皇季。皇少。五姓同期。俱駕龍號。曰五龍九龍。紀時有臣無官位。尊卑之別。

次條。人皇氏没。拒神次之。云依文。據れ。是所。此五姓。此事の有。ある。突出。尔。似。多。ま。ど。此。を。由。あ。依。事。也。其。を。遁。甲。開。山。圖。尔。五。龍。兄。弟。五。人。皆。人。面。龍。身。治。在。五。方。五。行。神。

也。云。依。如。く。此。を。木。火。土。金。水。此。謂。も。る。五。帝。尔。て。共。天。皇。氏。此。兒。子。尔。る。當。昔。共。よ。世。在。り。て。造。化。此。首。を。作。多。正。し。を。三。皇。を。共。よ。隱。没。して。其。神。靈。を。終。り。天。尔。を。五。星。及。び。大。微。此。五。帝。座。よ。留。は。り。地。尔。は。五。方。此。大。五。岳。尔。止。は。る。ま。と。太。古。傳。よ。委。曲。り。說。著。せ。依。が。如。し。其。を。史。記。漢。書。の。天。家。語。水。經。注。五。行。大。義。よ。と。緯。書。此。類。を。取。並。見。て。明。也。事。尔。る。近。く。清。此。段。王。裁。り。說。文。の。戊。字。よ。戊。中。宮。也。象。六。甲。五。龍。相。拘。絞。也。と。有。依。を。注。して。五。龍。者。五。行。也。水。經。注。引。遁。甲。開。山。圖。云。五。龍。治。在。五。方。爲。五。行。神。鬼。谷。子。盛。神。法。五。龍。陶。注。曰。五。龍。五。行。之。龍。也。許。謂。戊。字。之。形。象。六。甲。五。行。相。拘。絞。也。と。云。依。を。說。文。此。戊。字。の。說。を。惡。く。め。ま。五。龍。を。五。行。神。と。云。る。說。は。既。く。も。予。然。る。を。補。史。記。り。自。人。皇。已。後。有。五。龍。氏。按。五。龍。氏。兄。弟。五。人。竝。乘。龍。上。下。故。曰。五。龍。氏。を。載。せ。依。を。

始免諸史。此を人皇氏此次小在治せる。王者を爲と依也。
甚し死無稽此所爲也。按ふ。司馬貞。此謬也。載せる
謬を承るあり。然るは帝王世紀。全書を見ざれと。補史
記を大抵か。紀を取りて。作ると。趣は。見ゆ。皇甫謚が
此命。歴序を。め。見ると。事。世。紀。の。文。を。諸。書。引。と。依。を。察
て。知。る。ま。ど。も。司。馬。貞。が。命。歴。序。を。見。と。依。趣。を。其。著。書。見
え。依。を。ち。て。九。龍。紀。を。有。る。九。字。を。疑。お。く。五。字。を。誤。れ。る。お
あり。正。然。ま。ど。も。五。龍。を。王。者。よ。非。ざ。れ。ば。古。く。五。龍。紀。を。云。ふ。紀
號。此。有。る。由。れ。其。世。無。ま。ど。有。臣。無。官。位。尊。卑。之。別。お。ど
云。ふ。事。此。有。べ。也。よ。非。也。然。れ。ば。九。字。を。め。下。十三。字。は。後。人
此。攬。入。り。ぬ。ま。を。疑。お。し。削。り。去。て。可。れ。也。前。不。龍。字。は。頭
字。此。誤。写。お。て。九
頭。紀。の。時。は。然。有。し。を。云。れ。ら。む。と。思。牙。ま。ど。お。ち。其。も。人。皇
氏。此。世。小。を。似。於。う。交。路。史。の。黃。神。氏。此。所。よ。賈。公。彦。云。九。頭

紀時。有。臣。無。官。と。云。る。文。有。ま。ど。此。を。ち。て。次。條。此。初。形。依。人
賈。公。彦。が。意。と。改。め。と。依。ふ。や。有。む。
皇。氏。没。拒。神。次。之。を。云。る。八。字。は。疑。お。く。此。條。の。結。文。お。て。元
書。易。歴。お。た。決。然。多。皇。伯。皇。仲。皇。叔。皇。季。皇。少。五。姓。同。期。俱。駕
龍。號。曰。五。龍。人。皇。氏。没。拒。神。次。之。と。ぞ。有。り。む。然。云。ふ。故。を。五
龍。を。三。皇。此。世。小。出。て。共。小。造。化。神。首。を。作。ぬ。ま。ど。別。よ。世。を
有。て。依。よ。非。ざ。依。故。お。此。所。よ。附。記。せ。る。文。れ。ば。也。也。
六
人。皇。氏。没。拒。神。次。之。出。于。長。淮。駕。六。蜚。牟。政。三。百。歲。五。葉。千
五。百。歲。

此條此首文八字は上云如く前條此結文れるを此此首
文を失牙依故よ此八字をもて首と爲ぬ依おと疑れし然

らば其首文を何れ在けむを言ふ。下の條は此文例を思ふ。惟ふ拒神氏出于長淮とぞ在らむ。然て人皇氏没拒神次之と云ふ。前條は結文ぬる。準子て思ふ。次條ある黄神次之を云ふ文も。もと拒神氏没黄神次之を在りし文。此上四字残失して。下四字を錯亂し。殘せぬ者なり。此の錯亂を訂し。諸かく文理字考訂去まむ。其古文を決めて。見て知る。拒神氏出干長淮。駕六蜚羊。政三百歲。拒神氏没黄神次之。五葉千五百歲。とぞ在けむ。然て五葉を。五末葉と云ふが如く。次は黄神を。柏皇まで五氏を。拒神は末葉と由ゆ。其五氏は在治せぬ。歷數總て千五百歲の間ありける義あり。

已。此事委く。第十二條。はて路史に。彼丹壺記に因りて。人皇氏は次ふ。五龍氏を云ふ世を立て。其次は循蜚紀と多。鉅

靈。句疆。譙明。涿光。鉤陳。黄神。拒神。を敘ぬ。依を惑あり。斯て其拒神に傳む。此は本文字。其儘に採まる。間ふ。ちり數氏を加。お。人皇氏没拒神次之と云ふ文を存せぬ。何ぞや。若實り其間。然ば。ちり王者に有れむ。よは。人皇氏没して拒神あり。次とは云ふ。非也。

七 黄神氏或曰黄妹。黄頭大腹。出天齊。政則有官統。二百四十四歲。拒神次之。號曰黄神。一曰有人。黄頭大腹。出天齊。政三百四歲。黄神次之。號曰皇神。出淮。駕六蜚羊。政三百歲。五葉千

五百歳。神皇氏駕六蜚龍化三百歳。

此條は初免唯一行れ。黃神氏の本文よて。狹神と云と也。以下之。前條此條。次民此條。柏皇此條。總て四條此錯亂衍文。凡也。其は先一。狹神次之。此四字也。前條。入皇氏没。狹神次之。有依文此衍也。二。號曰黃神の四字は。此黃神此條。或曰黃祿と有依。祿字神不誤めて。錯亂せ依あり。然依必此義を悟らば。狹神次之。號曰黃神。此八字を前條ある。狹神氏の三百四十歳と有依。連書し。且ある。狹神次之。と云ふ文。依て。狹神氏を黃神氏の次。出せる。甚しき謬あり。而して號曰黃神と云。る文をも連書せ。黃神と云は。狹神此異號と為。依。其。狹神此。前。此。本文を取りて。黃神氏を出せる。何。ち。事。も。抑。か。る。謬。も。其。自。來。也。と。叙。ある。偽。妄。も。惑。牙。依。が。故。凡。り。け。也。三。一。曰。有。人。黃。頭。

大腹出天齊。此十一字は。即本條此一説よて。有人也云。依此みぞ異れ。四。政三百四歳の五字也。次。狹る。次。民氏の文の錯亂あり。前。不。一。曰。と云。と。一。連。此。文。不。て。黃。神。氏。依。狹。ら。む。と。思。む。し。う。ど。熟。く。思。予。バ。然。五。黃。神。次。之。此。四。字。也。前。條。此。政。三。百。歳。と。云。依。下。在。也。依。文。の。錯。亂。あり。此。由。は。既。上。云。也。六。號。曰。皇。神。此。四。字。は。上。錯。文。不。號。曰。皇。神。也。有。依。多。再。誤。れ。る。衍。文。凡。り。其。皇。と。黃。を。ハ。く。也。黃。帝。を。皇。帝。と。う。也。三。皇。を。三。黃。と。作。る。類。ひ。今。數。ふ。る。暇。非。だ。あ。む。七。出。淮。駕。六。蜚。羊。政。三。百。歳。五。葉。千。五。百。歳。の。十。六。字。也。前。條。狹。神。此。文。の。錯。亂。依。依。あ。や。言。ふ。も。更。凡。り。八。神。皇。氏。駕。六。蜚。龍。化。三。百。歳。と。有。

依神字也。柏字此誤寫也。此十一字也。柏皇氏此條の錯亂
れ也。此は亦不其條不論ふ字俟也。羅泌此義を得悟らば
る。神民氏と云も此の文也。一曰、神皇氏、駕六、蜚鹿、政三百歳
と記して、春秋命歴叙と標せるは、宋の牽強誣會と云、考し
て右に錯亂行文字、ま於如此く訂し、或は也。然て立却り
多。初此の一行字思ふ。或曰、黃祿とあ依或字は、下此條
此文例字思ふ。號を誤れる也。然れが此也。或字よても、
出天齊也。有依也。辰放氏此條。出地郭とある也。宋均注、
地名也と云、或も相發して思ふ也。是も地名よても。出天齊、政
を熟せる也。非也。政を疑れり。統三此間、不在し字此錯亂せ
る也。其の上よめ下るも、政幾百歳と有依也。相發して辨

ハ
ふるき也。羅泌此義を悟らば、出天
例に據る。末此次民次之と云文有也。其古文を決然て。
黃神氏號曰黃祿。黃頭大腹。出天齊則有官統。政三百四十歳。
黃神氏没次民次之也。そ在けむ。然て路史も。此黃神
此次よ出せ依は謬也。既も辨ふ依如也。其次も。犁
靈大騏。鬼騏。奔茲。泰逢。冉相。蓋盈。大鼓。雲陽。巫常。泰壹。空桑。神
民。倚帝也。云ふ。十四氏此傳を作也。其次も次民氏を出せ
依也。例に丹壺の惑れり。
次民氏是爲次是氏次是氏没元皇出天地易命以地紀穴
處之世終矣。

此條より缺文あり。其を第六條より五葉千五百歳と有ゆを。拒
 神此次形る。黄神と云。柏皇尔至ゆ。五葉此歳を總とる數
 依こと。彼條より云。如。形まむ。其五氏の歳數各くみ整は
 有は。じき事依。黄神。辰放。離光。三氏此歳數は有まど。
 此條の次民と。第十一條此柏皇尔歳數亦死。甚く不審
 恒心。安のらび在。る。前の第七條を。右此如く考訂
 せし。のむ。柏皇氏此歳數は所知とる。唯次民氏の歳數
 み所知。依を。彼錯文とも。殘悉く其條より配屬せ依。殘を
 視れむ。政三百四歳の五字此み餘。何處此錯文亦も非
 交。よと誤文やも見。え。是若く。次民氏の歳數此。錯亂

非。じ。う。を。思。ひ。得。て。其。五。字。を。此。條。に。補。ひ。て。其。年。數。を。推
 檢。ゆ。五。葉。千。五。百。歳。と。有。ゆ。五。十。四。年。餘。れ。り。然。ま。ど。其
 五。氏。の。在。世。し。け。依。大。數。の。傳。牙。不。て。案。を。伏。義。氏。の。世。ま
 て。よ。係。也。盤。古。氏。以。來。此。紀。元。此。年。數。い。や。正。整。り。符。合。せ。る
 也。第。十。二。條。不。記。去。依。如。れ。は。最。も。不。思。議。よ。奇。異。死。事
 也。擗。も。依。あ。し。此。上。古。此。歷。數。よ。成。童。此。頃。を。疑。ひ。有
 也。殊。り。て。往。し。文。政。十。年。の。頃。と。り。赤。縣。太。古。傳。を。著。次。と。為
 也。殊。り。且。は。意。を。用。ひ。て。伏。義。以。來。此。年。歷。を。更。あ。り。其。以。前。此
 歳。數。も。且。は。正。數。を。整。ふ。る。初。也。然。は。古。史。此。年。曆。編。を。作
 缺。多。る。其。正。數。を。整。ふ。る。初。也。然。は。古。史。此。年。曆。編。を。作
 依。よ。今。天。保。二。年。八。月。の。初。也。然。は。古。史。此。年。曆。編。を。作
 前。條。の。錯。亂。を。訂。正。せ。む。と。思。ひ。付。て。考。究。せ。る。其。二。氏
 此。歳。數。を。右。此。如。く。知。得。て。ぞ。有。心。懸。ぎ。ら。む。人。を。己。が
 云。ふ。日。也。か。依。事。を。し。然。し。も。心。懸。ぎ。ら。む。人。を。己。が

思ふ如く、奇異とを思ふは、しき事、れまど、夢、尔も、現、よも、心、
不繫、々、し、己、グ、魯、き、心、よ、は、錯、乱、あ、の、ら、も、次、民、氏、と、り、今、不、
至、り、て、七、千、歳、に、近、ま、間、を、能、く、も、傳、り、て、我、グ、心、を、聞、ら、る、
事、と、思、つ、バ、愉、快、と、も、奇、と、め、辱、し、と、も、云、む、去、べ、ぞ、無、り、
け、る、其、を、此、考、を、ろ、あ、し、此、年、歴、を、更、あ、り、吾、グ、神、然、て、次、是、
世、の、年、歴、を、め、稽、考、明、に、な、す、基、を、も、為、ま、濫、れ、也、然、て、次、是、
氏、没、を、云、と、り、以、地、紀、と、云、は、て、十、四、字、を、初、發、し、引、多、依、摘、
六、辟、よ、易、歴、曰、次、是、氏、没、六、皇、出、天、地、命、易、以、第、絶、と、有、る、と、
同、文、形、る、が、宋、均、注、よ、六、皇、此、下、人、數、者、也、と、云、る、は、然、依、言、
小、て、是、と、り、下、れ、辰、放、離、光、柏、皇、伏、羲、神、農、黃、帝、此、六、氏、字、指、
せ、也、然、れ、む、此、は、本、文、よ、元、皇、と、有、る、を、六、皇、の、誤、寫、れ、也、
よ、今、此、本、文、の、ま、く、次、民、氏、の、傳、を、取、り、て、載、せ、依、よ、も、元、
皇、出、と、有、れ、む、古、き、誤、字、を、て、ハ、有、ら、ず、凡、多、路、史、命、歴、序、
を、引、る、文、を、見、る、大、の、と、今、舉、る、本、文、此、如、く、錯、乱、誤、字、
も、同、じ、地、を、宋、世、よ、既、ふ、右、此、如、く、在、し、れ、り、其、を、大、凡、

易歴ばあり、古、地、書、は、希、れ、る、上、よ、狹、意、ぶ、る、後、世、此、は、と、本、
風、俗、よ、を、用、ら、ま、び、て、適、不、散、残、れ、る、故、よ、や、有、ら、む、は、と、本、
文、よ、易、命、と、あ、依、を、摘、六、辟、よ、を、命、易、を、何、也、此、を、孰、れ、て、も、
有、ら、ず、は、と、本、文、よ、以、地、紀、を、有、依、を、摘、六、辟、は、以、第、絶、を、
あ、也、地、を、第、と、は、古、く、同、義、よ、用、り、ま、む、是、よ、も、孰、れ、て、も、難、
無、れ、ど、絶、を、誤、寫、れ、也、紀、を、正、を、爲、ら、ず、
次、民、氏、此、世、頃、は、天、紀、よ、當、れ、也、
義、取、る、よ、と、第、十、二、條、よ、太、昊、氏、作、曆、の、時、よ、人、天、易、命、せ、る、
事、を、論、ず、る、よ、思、ひ、け、て、如、此、く、考、考、定、め、て、其、文、を、正、次、よ、
合、せ、て、辨、ふ、法、し、
易、歴、孔、古、文、を、決、め、る、次、民、氏、是、爲、次、是、氏、政、二、百、四、歳、次、是、
氏、没、六、皇、出、天、地、易、命、以、地、紀、穴、處、之、世、終、矣、と、ぞ、有、ら、む、然、
て、路、史、よ、此、次、民、氏、よ、て、姓、循、蜚、紀、を、爲、て、凡、二、十、二、氏、六、十、

餘世と云ふは謂ゆる丹壺此惑ふなり。

辰放氏は爲皇次屈

宋均注云辰放皇次屈之名也

渠頭四乳駕六蜚塵出

地郭

宋均注云地郭地名

而從日月上下天地與神合謀

注云從謂順度古初

之人卉服蔽體次民氏沒辰放氏作時多陰風乃教民擇木

茹皮以禦風霜

注云茹蘊也茹毛蘊被其毛

絢髮閉首以去靈雨而人從

之命之曰衣皮之人

彼摘六辟尔辰放大頭四乳號曰皇次屈出地敦駕六飛麟從

日月治二百五十歲と有は此條の畧文あり

今此本文を古微書より出

せるは其注を漏せり今は摘六辟此文を路史より引る文此注をとりて加す

は辰放氏此歳

數字摘六辟より二百五十歳とある二を三に誤寫して次條

尔帝辰放在位二百五十年離光次之也有は此條の正けまむ此を採り上此文例より依りて衣皮之人と云ふ下より政三百五十歳辰放氏没離光次之とふ十四字を補多むし易歴此古文は決めて然る所在に於て遺まより雷雨とある聖を決め字ぬるは然る路史より是辰放氏を因提紀に初めして離光氏まで此間を蜀山懸魄渾沌東戸と云ふ四氏を出せれ也例の丹壺此妄誕ありかし

十帝辰放在位二百五十年離光次之號曰皇談銳頭日角駕六鳳皇出地衡治二百六十歳

此條に離光次之と云はて十四字はを前條に結文に依

多。此條の首文を失^ク子^ク故^ク。此^レは^レ接續せりや見^ル也。そは帝辰故と
云ひ在位と云ふも前後此文を政若干歳まよと然^ラば此條
治若干歳をある例は違^フる我も思ふを此首文を何^カ有^ルむや云ふも是も前後此文例を思ふ
號字此上^ク。離光氏は此四字ありて其古文よを決^スて離
光氏は號曰^ク皇談銳頭日角駕六鳳皇出地衡治二百六十歲
離光氏没柏皇次之^トとぞ有^ルむ。路史此を皇覃氏と作^スぬ
然して本傳を命歷序を取れる其文よ銳を兌駕を格^ル作^ル
ゆ六十を五十よ作^リて注よ命歷序云次民氏没離光次之
號曰皇談治二百五十歲と然^ラて路史よ此次よ啓統吉夷几
有^ルゆを信^ズられぬ本^レ取^ルゆ。濠^ス稀^ス章^ス有^ル巢^ス遂^ス入^ル庸^ス成^スと云ふ七氏の傳を作^リ出^シて右因
提紀凡六十有六世を云^ハゆを又例^レ此丹壺よ據^ルれぬ説^ルゆ。

元^トと^ク取^ルゆよ足^ラぬ^レ也。

一十
德^ヲ

柏皇氏是爲^ル皇伯登出博桑日之陽駕六龍而上下以木紀^ス

此條も落文あり其第七條あり神皇氏駕六蜚龍化三
百歳を何^レ神^ト也柏字此誤寫よて此條の錯文あるを既^ニ
ふ云^ハゆが如^シ然^ラて日之陽と云^フこと語^ヲ成^スさ^ズ也甚^ク讀^ムの^ト
如^シ文^ヲ取^ルるを熟^ク考^フるよ河圖括地象よ淮南子よ世界
此大九州此事を云^ハゆ文^ヲ正^ス東陽州曰^ク申土とありて陽州
とを扶桑州の事あり然^レも今^ノ文^ニ此^レ日は日^ヲを誤^ル州^ヲを落
せゆふて曰^ク之陽州と有^リし注文の本文よ入^リあるあり如^シ

此考子定むれむ。易歴の古文は決然て。柏皇氏是爲皇伯。登
出搏桑陽州。駕六蜚龍而上下。以木紀德。化三百歲。柏皇氏没
伏羲次之。とぞ有けむ。路史此本文よ。此文を採れるよ。然て
登桑の二字を省けるを非あり。然て
路史ふ。禪通紀やて。是前より史皇氏と云ふ字出し。次ふ柏皇。
中皇。大庭。栗陸。昆連。軒轅。赫蘇。葛天。尊盧。祝誦。昊英。朱襄。陰康。
無懷。有巢の十六氏字出して。次ふ太昊紀を出せり。此は例
此丹壺記よ據れぬ事ぬる。因よ云ふ諸書よ驪連赫胥祝
書ぬも丹壺此奸融と有るを昆連赫蘇祝誦と
を信ぜしあり。史皇やば倉頡が事よて。此は黃帝此史臣
ぬる。鳥迹篆を作れぬ人ぬるこや。諸書よ所見ぬ依如
依を。史皇や稱ふ皇字とゆ誣會して。王者此列ふ加子し物

ぬ也。然依よ羅泌是妄を信じて。其傳ふ河圖玉版の倉頡爲
帝南巡狩登陽虛山臨于玄扈洛汭之水靈龜負書丹甲青文。
以授之帝。文止二十八字。景刻于陽虛之石室也。ある。此文を
路史よ
引ぬると古微書よ出せ
依をを校合して引とゆ。授字とゆ上字取り。倉頡爲帝と句
して。帝謂倉頡とて。其證を爲と依を最陋し。そは南巡狩を
云とゆ以下茂熟く見ぬ。尚書中候ふ。黃帝巡洛龜書赤文
成字。以授軒轅。まよ春秋演孔圖よ。黃帝坐玄扈洛水上。與大
司馬容光等臨觀。鳳皇銜圖置黃帝前。再拜受圖。宋均注。玄扈
石室名也。と有依を類説ふて。黃帝此事實ぬまむ。此は疑ふ
く爲帝此間よ脫文あ依よる。帝とを即黃帝ふて。倉頡ぬら

然^{アキ}こ^ラを^カ著^カ明^カふ^カ也。ま^カと^カ元^カ命^カ苞^カ及^カ演^カ孔^カ図^カ敘^カ帝^カ王^カ之^カ相^カ云^カ倉^カ頡^カ
人^カ臣^カ也^カ倉^カ頡^カ既^カ王^カと^カ云^カ予^カれ^カど^カ演^カ孔^カ図^カの^カ列^カし^カ餘^カの^カ人^カ臣^カ凡^カき^カ
は^カ偶^カ然^カ此^カ事^カよ^カあ^カそ^カ有^カま^カ元^カ命^カ苞^カ此^カ事^カを^カ載^カゑ^カる^カふ^カ人^カ臣^カ
の^カ后^カ稷^カも^カ入^カと^カま^カむ^カ此^カ也^カ證^カと^カを^カ疑^カぶ^カの^カら^カば^カ楊^カ升^カ奄^カ外^カ集^カし^カ
羅^カ泌^カ路^カ史^カ以^カ軒^カ轅^カ与^カ黃^カ帝^カ非^カ是^カ一^カ帝^カ史^カ皇^カ与^カ蒼^カ頡^カ乃^カ一^カ君^カ一^カ臣^カ
蓋^カ洪^カ荒^カ之^カ世^カ存^カ之^カ而^カ論^カ可^カ也^カと^カけ^カて^カ柏^カ皇^カ氏^カと^カり^カ下^カ十五^カ氏^カ姓^カ
云^カひ^カて^カ其^カ辨^カお^カき^カを^カ何^カぞ^カや^カ 次序^カは^カ既^カよ^カも^カ云^カふ^カ如^カく^カ本^カ據^カあ^カり^カ其^カ六^カ韜^カよ^カ昔^カ柏^カ皇^カ氏^カ栗^カ
陸^カ氏^カ驪^カ連^カ氏^カ軒^カ轅^カ氏^カ赫^カ胥^カ氏^カ尊^カ盧^カ氏^カ祝^カ融^カ氏^カ此^カ古^カ之^カ王^カ者^カ也^カ未^カ
使^カ民^カ民^カ化^カ未^カ賞^カ民^カ民^カ勸^カ此^カ皆^カ古^カ之^カ善^カ爲^カ政^カ者^カ也^カ至^カ於^カ伏^カ義^カ氏^カ神^カ
農^カ氏^カ教^カ化^カ而^カ不^カ誅^カ也^カ見^カえ^カ此^カ文^カ今^カ本^カよ^カ缺^カと^カり^カ今^カ平^カ津^カ館^カ叢^カ
書^カ出^カせ^カる^カ六^カ韜^カ逸^カ文^カを^カも^カて^カ引^カと^カ
る^カあり^カ劉^カ恕^カグ^カ外^カ紀^カよ^カ此^カ文^カを^カ引^カ 莊^カ子^カ胙^カ篋^カ篇^カ尔^カ昔^カ者^カ容^カ成^カ氏^カ
と^カ依^カる^カ六^カ韜^カ大^カ明^カ篇^カと^カ云^カへ^カり^カ 大^カ庭^カ氏^カ伯^カ皇^カ氏^カ中^カ央^カ氏^カ栗^カ陸^カ氏^カ驪^カ畜^カ氏^カ軒^カ轅^カ氏^カ赫^カ胥^カ氏^カ尊^カ盧^カ氏^カ

祝^カ融^カ氏^カ伏^カ戲^カ氏^カ神^カ農^カ氏^カ當^カ是^カ時^カ也^カ民^カ結^カ繩^カ而^カ用^カ之^カと^カり^カ金^カ樓^カ
此^カと^カ同^カじ^カ文^カ此^カ出^カと^カる^カよ^カ軒^カ轅^カ氏^カの^カ然^カま^カむ^カ此^カ二^カ書^カ此^カ諸^カ氏^カ
名^カあり^カ驪^カ畜^カ氏^カと^カハ^カ驪^カ連^カ氏^カあり^カべ^カし^カ 下^カよ^カ引^カく^カ開^カ山^カ圖^カ此^カ諸^カ氏^カと^カ戎^カ取^カ捨^カし^カて^カ十五^カ氏^カを^カ定^カめ^カ此^カ
多^カ伏^カ義^カ以^カ前^カの^カ諸^カ氏^カを^カ爲^カと^カ依^カ事^カは^カ史^カ記^カ此^カ封^カ禪^カ書^カ小^カ管^カ仲^カ曰^カ
古^カ者^カ封^カ泰^カ山^カ禪^カ梁^カ父^カ者^カ七^カ十^カ二^カ家^カ而^カ夷^カ吾^カ所^カ記^カ者^カ十^カ有^カ二^カ焉^カ昔^カ
無^カ懷^カ氏^カ封^カ泰^カ山^カ禪^カ云^カ云^カ慮^カ義^カ氏^カ封^カ泰^カ山^カ禪^カ云^カ云^カ神^カ農^カ氏^カ封^カ泰^カ山^カ
禪^カ云^カ云^カ有^カ依^カあ^カむ^カ據^カれ^カる^カ物^カ凡^カ也^カ 泰山^カ云^カ云^カと^カも^カよ^カ山^カの^カ
と^カり^カ次^カく^カ炎^カ帝^カ黃^カ帝^カ顓^カ頊^カ帝^カ堯^カ舜^カ禹^カ湯^カ周^カ成^カ王^カを^カ出^カせ^カり^カ是^カ
七^カ十^カ二^カ家^カと^カ云^カふ^カ中^カ尔^カ無^カ懷^カ氏^カと^カり^カ周^カ成^カ王^カよ^カで^カ十^カ二^カ王^カの^カ
封^カ禪^カを^カ記^カえ^カと^カま^カむ^カ無^カ懷^カ以^カ前^カ六^カ十^カ家^カ此^カ名^カを^カ記^カえ^カば^カと^カ云^カふ^カ
ふ^カ也^カ此^カは^カ管^カ子^カ封^カ禪^カ篇^カ此^カ文^カあり^カし^カと^カ聞^カゆ^カる^カ今^カ本^カよ^カ此^カ篇^カ
を^カ缺^カと^カり^カ然^カま^カむ^カ後^カ人^カ史^カ ち^カて^カ封^カ禪^カ書^カ此^カ注^カふ^カ無^カ懷^カ氏^カ古^カ之^カ
記^カよ^カ取^カり^カて^カ補^カす^カる^カあり^カ ち^カて^カ封^カ禪^カ書^カ此^カ注^カふ^カ無^カ懷^カ氏^カ古^カ之^カ

王者在伏羲前見莊子也。有まど。莊子小此氏外まこと。上カミ引キ出キるグ如シ。彼補史記ルも。右此諸書及ビ。帝王世紀ル據ヨリ多クと見え。自人皇已後有リ五龍氏。燧人氏。大庭氏。柏皇氏。中央氏。卷須氏。栗陸氏。驪連氏。赫胥氏。尊盧氏。渾沌氏。昊英氏。有巢氏。朱襄氏。葛天氏。陰康氏。無懷氏。斯蓋三皇已來有リ天下者之號。而韓詩以爲自古封太山。禪梁甫者。萬有餘家。仲尼觀之。不能盡識。云々。記して。其自注ヨ。皇甫謐以爲大庭氏已下。皆襲伏羲之號。難可依從。按古封太山者。首有無懷氏。乃在太昊氏之前。豈得如謐所說と云レ。皇甫謐ガ所說ト也。即チかハ學記ヨ。帝王世紀曰。女媧氏没。次有リ大庭氏。柏皇氏。中央氏。栗陸氏。驪連氏。赫胥氏。尊盧氏。渾沌氏。有巢氏。朱襄氏。葛天氏。陰

康氏。無懷氏。凡十五世皆襲庖犧之號。有リ不レ知ル也。斯レ皇甫謐ガ凡十五世と云ル也。庖犧女媧ともハ十五世の意あり。補史記ヨ。此諸氏を天昊氏ハ後ニ在リと云ル。說ヲをテそ取リぬ。大庭氏以下の名及ビ。其ハ次序ヲをテ世紀ヨリ取リとス。中ニ庖犧女媧ハ是レより後ニと為ス。故ニ卷須氏。昊英氏と云フ。二氏ヲを加シて。十五氏ヲ為ス。昊英氏と云フ。名ヲ開キ山ニ図ル。所見トれど。卷須氏と云フ。名ヲ前後ニ引キ出スる書等ハも。出スる名ハ。何レ據リて此ニ加ヘしク。心得ヲとス。然レも。皇甫謐ガ大庭氏以下ニ伏羲ト後ニと云フ。據ルも。本據ハあリ事ハ小シ。其ハ遁甲開山圖ニ。女媧氏没。大庭氏王有リ天下。次有リ柏皇氏。中央氏。栗陸氏。驪連氏。赫胥氏。尊盧氏。祝融氏。混沌氏。昊英氏。有巢氏。葛天氏。陰康氏。朱襄氏。無懷氏。凡十五代。皆襲庖犧之號。と有リ。據ルれル說ハ小シ。遁甲開山圖傳ハらズ。此文は。說ヲ引キとスるを再ニ引キとスるあり。漢書ノ古今人表ニ。宓戲氏ノ後。神農氏ハ前ニ。女媧氏ハ共工氏ノ容成氏

大庭氏。柏皇氏。中央氏。栗陸氏。驪連氏。赫胥氏。等。盧氏。渾沌氏。吳英氏。有巢氏。朱襄氏。葛天氏。陰康氏。亡懷氏。東扈氏。帝鴻氏。と有る。開山圖の説を再録れ。然らば此等此諸氏也。伏羲氏は説を見ゆまば論じよ及ば。此前と云む。後や云る兩説の中。孰り正説れむと言ふ。右諸書此中。有巢氏とを辰放氏此異號。燧人氏を伏羲氏の異説。大庭氏を神農此號。軒轅氏を黄帝此號を。各々別氏と傳予訛正しれり。然るを路史よ。この有巢燧人。大庭軒轅れども辰放伏羲神農。黄帝を。別れり氏くと為て。俗説訛傳多多く聚めて。附會此説を成多ゆ。彼謂ゆ。丹壺記よ。惑予る故此非事。凡そ總て論じ。然れば。右此四氏を除去て。其餘此諸氏は。ふれも足ばりし。王者よ非也。柏皇氏此當昔をり。次くよ其號を襲死稱れ。諸侯此類れる者よて。伏羲の世を更あり。其後尔も名此聞

えし故り。六韜。莊子。管子。開山圖。史記。世記を始也。其餘の諸書尔も。伏羲此前とも後やも言む。う皆王者とは予よ。思ひ訛れる物あり。天皇氏以降。黄帝以往此間。此諸氏ら此王位よ居べ死世此無こや。上下よ論ふ如れまむ。右此訛説どもは。一切よ掃除し畢るべき事尔もそ。然まど右の諸氏。宋よ其世くよ。諸侯として在る。ゆ事を違ふ無れむ。あ不此。外小も。諸書より拾む出て。太古傳よ説著せるを見る。ゆし。ちて補史記よ引多ゆ。韓詩外傳よ。萬有餘家此王者此。在る。ゆ趣よ謂予。ゆを。例此荒唐固とゆ論ふ。り足らば。管子よ。七十二家と有るも。此書管子。自記尔非ざゆ上よ。去を百尔足らば。五十よ多く餘るを云ふ。大數此常語尔て。實數然らば。本據

やを爲難ナレガれれぞ。夷吾カ所記者。十有二と云、こやを。少くスミ稽ふ
所トおたれ非ト交ト。此ニ封禪を革命此王者おとよ必行ふ事
て此十有二中よ周武王此名おくて成王の名ありまよ黄
帝の次り必少昊氏あるをきよ其名おと神農此名のあり
が上よほよ炎帝と有はハ是神農此未あるよ封禪せはる
一世お二代此封禪あり然れむ此を別お猶とく考ふをき
事あり。其を柏皇氏の次を直よ伏羲氏おるよ。夷吾が記え
し十有二家よ。伏羲氏此上は直よ無懷氏おを思ふよ。此
は疑ウツれく同氏此異號と死おも。然はを柏皇氏を伏羲氏此
隠没せは後まで在世おて。其功業を佐けし趣おまば。是を
正始免て。封禪此名を傳ツタへむと所思れむおり。其を封禪を
れむ。必山石よ其名を彫ハ著ラし事おるよ。柏皇氏おくて。無懷

氏此名有は字以て。知り辨ふる。此を既く孝經援神契よ。
梁父刻石紀號示典功と見え。路史の餘論よ書之敘曰伏羲
氏王天下造書契以代結繩之政。由是文籍生焉。是則書契之
興出於羲氏有無疑者。無懷氏固已封泰山。照姓紀號播之山
石。其書略已見於尉律。則是伏羲之有書契為不迂也。曷得謂
至黃帝始有書契乎。然まむ其七十二家と傳ツタへしも固モトとめ古
死妄誕ふて。夷吾が記えし十有二家ぞ。元とめ諦サしき。封禪
此正數おはるべき。然てを。遁甲開山圖お依ヨて。彼十五氏の
中お。柏皇無懷此二名お出せる。世紀補史記。及び此二書此
名敘よ從シて諸史編年此類おはる書等。みお考證お鹿漏お
ぞ有るは。皇マと此よ就て按アて。六韜。莊子。金樓子。おとよ柏
皇ありて無懷おハ。同氏ある事。お知りて。省け
る傳ツタへし。ちて天皇氏お始免て。木徳と稱して。其とめ次く。

離光氏亦至迄まで其徳を稱せ。柏皇氏も至て。搏桑と
り登出せり。と云む。以木紀徳と云ふ。是亦準子て。天皇
氏の本居も搏桑なるが。其州とり彼處に渡れる故に。木徳
を稱せ。依義をも著せ。依りて。斯て地皇氏の下に興于熊耳
龍門等山と有。依りて扶桑とり渡りて。其山等も出興せ。依り
由。依りて人皇氏を。陽谷より出ぬり。と有。其谷ま。扶桑
此地に在り。その山海東荒經及淮南子地形訓。依りてを見
て知る。是をめて蜀志に秦宓傳に。三皇乘祗車出谷口と
云。依傳も依りて。然るに其語中。ふを蜀國の斜谷と云ふ。谷
は魏畧を引ききて論へるが如し。ま。天皇氏を無外之山と
り出とて。とふ説の。鄭玄説に。無外山在崑崙之東南也と

云り。崑崙は河図括地象に。北極直下は在。と云ふ。山あり。是
は依りて。其無外山の方位を思ふ。是も扶桑域内の山名
あることを灼然のり。此等此事とも。既り太古傳と。扶桑國考
とよ。委曲小考證せまむ。今更に委くを云。唯其大畧を云
ふ。依りて三皇を柏皇とを。搏桑陽谷の域とり。出ぬ依り由
顯し。其中間に。狹神等。此五氏も。其徳を稱せ。依りては。前
後此兩氏も準子て。其よ木徳を依義を令知とる物なり。然
れに。或は出長淮と云む。或は出天齊。或は出地郭。おと云。依
りて。扶桑州とり渡りて。然る所。ふ出興せ。義依りて。著
し。そは六鳳皇も乗ると言む。六飛龍も駕次を云。亦も皆。他
邦とり渡りて。其所。ふ出興せ。依りて。聞ゆ。依りて。思ひ合せ。
う。於狹神の條。黃神とり柏皇までを五葉と云。依りて。子孫

此義取らる。最末イハスれる柏皇氏を搏桑ハツクふ出イせ云るれぞ哉。平
心ヲ思ひ合せて。其父祖ハ本居ハ哉も曉サす辨ハふるきあハす。斯ハ
も仍ハ舊習を存して。狐疑ハ波滯ハ此情止ハざらむハけり右ハ此如く。
小ハむ太古傳ハを見ても。其宿染ハを洗ハひ去ハるし。諸氏ハの條ハ々ハ校正ハし終ハすて後ハも。往古ハの年歴ハを推考ハふ依
る。其開闢ハ此歳ハや。のて盤古ハ氏ハ此元年ハあて。尚書ハ中候ハも。天地
開闢ハ甲子ハ冬至ハを見え。易緯ハ乾鑿度ハも。日ハ甲子ハ歳ハ甲寅ハを有ハ依
め。開闢ハ此曆元ハを云ハ依語ハをまハす。是元年ハ甲寅ハを算ハ起ハし
て。其一世ハ一万八千歳ハを推歩ハ依ハる。三百甲寅ハ下ハりて。其末
年ハ癸丑ハれり。但ハし開闢ハの年歴ハを論ハふハ太昊ハの時ハも創ハめ
も有ハるハまハす。此ハ有ハ名ハ此後ハを以ハて云ハふ事ハを。何ハぞや思ハふ
此古ハを語る常ハの例ハあり。異ハむこと勿ハき。斯ハて天地ハ二皇ハ此元

年ハを。右癸丑ハ歳の次年ハれり甲寅ハふ當ハまハす。其偶世ハ一万八千
歳ハも。三百甲寅ハ此間ハあて癸丑ハよ終ハす。次ハも人皇ハ氏ハ此一世ハ三
千三百歳ハも。其元年ハを甲寅ハれまハす。五十五甲寅ハ下ハりて癸丑
ふ終ハす。其次ハ狫神ハ氏ハの元年ハはハ甲寅ハあて。其一世ハ三百歳ハも。
五甲寅ハ下ハりて癸丑ハよ終ハまハす。既ハも上ハ引ハある後漢ハの歴志ハ
依ハる。天皇ハ氏ハ此條ハも。歳起ハ撰提ハと有ハる文ハの事ハをハまハす。此歳ハを
ゆ。人皇ハ以下ハの元年ハを。順推ハ依ハる言ハふも更ハれり。盤古ハ氏ハの
元年ハを逆推ハ依ハるも。過ハりて甲寅ハよて。其歳首ハを。甲子ハ冬至ハ此
日ハあるを。まハす。其日ハをり次ハく。六十甲子ハを以ハて除ハひ下ハま
す。天皇ハ氏ハ元年ハの歳首ハ及ハび人皇ハ氏ハ元年ハの歳首ハとも。甲子
冬至ハも當ハり。狫神ハ氏ハ元年ハ此歳首ハを。己酉ハ冬至ハ此日ハも當ハり。
けり。其次ハ黃神ハ氏ハ此元年ハも甲寅ハあまハす。其一世ハを。三百四十
歳ハれまハす。五甲寅ハと四十年ハあて。癸巳ハふ終ハり。次ハれり次民ハ氏

此元年を甲午ぬるが。一世三百四歳あまハ。五甲午や四年
 ぶて丁酉よ終也。其次辰放氏此元年は。戊戌ぬるが。其一世
 三百五十歳を。五戊戌や五十年ぶて丁亥よ終也。次あは離
 光氏此元年は戊子よて。一世二百六十歳ぬまを。四戊子や
 二十年ぶて丁未よ終ぬ。其次柏皇氏の元年は。戊申ぬるが。
 其一世三百歳を五戊申よ多。丁未よ終ま也。かくて黄神氏
元年の歳首冬
至を甲子。次民氏元年此歳首冬至を己酉。辰放氏元年此歳
首冬至を乙酉。離光氏元年の歳首冬至を壬戌。柏皇氏元年
此歳首冬至をハ。丁未よ當也。乃依。あ不此。柏皇氏此年歴と。太界氏此年歴と
未尔ぞ當也。乃依。
 此。聯續ある年時此議を。次條よ論ふ字俟をし。

三ノ古突仕知の天年以て其一世一御八十

